

モデル事業名	交流促進による地域活性化モデル事業
活動団体名	おちちょう にじいろ さとよこばたけ 越知町 虹色の里横島
ホームページ	http://yokobatake.jp
所属/ 担当者名	ご担当者氏名（お問合せ先） 武智 龍
連絡先	電話番号、090-9772-3969 Eメールアドレス ryu_takechi@jp.bigplanet.com
活動地域	こうちけん たかおかぐん おちちょう よこばたけ 高知県 高岡郡 越知町 横島 （横島西部地区）

● 活動地域の概要

横島西部地区は、越知町中心市街地から北へ10km程入った標高400m前後の山間部に開けた農村地域で、四国3大河川仁淀川が周囲を回り込む様に流れており素晴らしいロケーションに恵まれている。

またこの地域は、畑作農業が主体で、主要作物として生姜、薬草、サンショウなどが生産されている。

しかし、近年後継者の地区外転出などにより高齢化が進行して、8集落中7集落が限界集落となり、20年前152世帯約420人だった人口も、現在は127世帯約300人になった。

平成15年には、地域のシンボルとして128年間続いた横島小学校も休校となった。

そこで地域の有志たちが、地域活性化グループ「虹色の里横島」を結成し、交流人口を増やすことで衰退していく横島を元気づけようと「茶摘み体験ツアー」や「いも煮会」などのイベントを開催している。

20年度、本事業に採択されたことによって、地域資源を様々な角度から再評価を行い、旧松山街道などの史跡や豊富な種類の農産物、巧みな技を持つ人々の存在、今でもこよなく愛されている小学校など横島の強みを再発見するとともに、第2次基本計画「虹色の里横島 虹色プラン」を策定し、虹色の里横島の今後に向けた新たな一歩を踏み出した。

● 活動地域の課題

- ① 休校中の小学校の活用
- ② 空き家や遊休農地の増加
- ③ 今後も進むと予測される高齢化と人口減少を食い止めること
- ④ 高齢化による集落維持機能の衰退
- ⑤ 農業後継者の育成とUターンなど外部の人材活用
- ⑥ 農産物加工・販売などによる新しい産業起こし

上記の課題を解決するための行政との連携や住民自治意識の向上など。

● 活動の内容

（全体）21年度は、20年度に本事業によって作成した「第2次虹色プラン」に掲げた(1)「農山村に磨きをかける」、(2) 学校を活かす、(3) 「人と人とのつながりを大切に作る」という3つの柱に沿って活動した。

(1)の具体的な活動としては、①横島の地域資源を活かした体験型観光の実施（町内からモニターを募り、遊休農地を活用してソバの栽培とソバ打ち体験をした。）②横島の豊かな農産物・加工品等の活用（①と同じモニターでサツマイモの栽培と加工品「ひがしやま」づくりの体験をした。）③地域内環境の整備（貴重な地域資源である旧松山街道（8km区間）や大山祇神社などへ案内説明板やベンチを30箇所設置した）

(2)は、横島のシンボル「横島小学校」の整備（横島小学校活用について、小学校活用委員会を設置して検討会を行いその結果を全地区を訪問して住民説明会を開催した。）

(3)は、「虹色の里横島」運営体制の強化（重労働や家の修理などが困難な高齢者などを手助けするため、地域内の定年退職者など豊富な知識や技術を持っている人たちによる「横島なんでもお助け隊」を結成。地域を訪れる人たちをもてなすための自然案内人の育成とガイドブックの作成、ホームページの開設など）

（直近1年間の進捗など）

①22年度は、体験型観光として、遊休農地を活用してソバの栽培から、刈り取り、乾燥、脱穀、ソバ打ちまで、一貫して体験できるメニューを計画し、参加者を募って現在実施中。

②再整備された「旧松山街道」は、脱藩の志士やジョン万次郎など歴史的な人物とのゆかりがあり、22年5月に県内から参加者80人を募り「松山街道探検ウォーク」を開催した。2回目は、23年2月に計画している。

③地域内環境の整備として、22年度に全(8)地区へ「情報掲示板」を設置する。（23年2月予定）

- ④休校中の横畠小学校を地域の交流拠点として整備する計画が22年12月に町議会で了承され、町が事業の申請作業に着手した。
- ⑤「虹色の里横畠」運営体制強化のため、町が23年度から「緑のふるさと協力隊」を入れることになり、22年末から手続きに着手した。
- また、23年1月から「虹色の里横畠」のメンバーを中心に、地域の幅広い組織や人の参加による地域づくりを進めるため、「横畠西部自治公民館」結成の準備(話し合い3回)も進み始めた。

● 活動の成果

◆ 全体 (活動の成果、地域内での反響・効果及び周辺への波及効果等について記入)

- (1) 事業で作成した「第2次虹色プラン」や「横畠小学校活用計画書」は、地域住民に夢と希望が持てる将来像を示すことができた。
- (2) 20・21年度各1回ずつ8地区で報告会を開催したことで、地区から今後も継続して開催してほしいという要望が出され、住民間のコミュニケーションが図りやすくなった。
- (3) サツマイモやそばなどを使った農業体験は、実際に地域活性化に活用できる体験型観光のメニューとして自信を得た。
- (4) 旧松山街道の歩道整備や標識等の設置により、交流促進の基盤整備ができた。
- (5) 21年6月に高知県知事との対話集会在横畠で行われ、地方テレビ局の番組出演や視察、事例発表などの第3者から評価される機会が増えた。また、このことにより、メンバーが地域や自分たちの取り組みに自信を持ち、更にステップアップしたいという意欲が増してきている。



初めてのソバの刈り取り作業を楽しむ参加者

◆ 直近1年間の成果など

(活動の状況、地域内での反響・効果及び周辺への波及効果等について記入)

- (1) 「第2次虹色プラン」や「横畠小学校活用計画書」は、行政や議会を動かすためのわかりやすい指針となった。
具体的には、①学校活用にあたって、行政の支援や議会の理解と賛同が得られたこと。②「横畠西部自治公民館」結成の動きにつながっていること。
- (2) 町議会も、廃校活用の実態把握のため、先進地視察を22年度内に行うことになった。
- (3) 事務局体制の強化を検討する中で、町が「緑のふるさと協力隊」の派遣を要請することが決まり、空き家や遊休農地の活用、IUターン者の誘致のきっかけができた。また、大学等との交流を検討したり体験した結果、23年3月に関西の大学が継続して学生を派遣してくれることになり、今後の新しい展開が期待できる。
- (4) 地域内に新しい産業育成を目的として、農産物の加工販売を手がけるグループを結成しようという話が持ち上がってきた。



都会育ちの学生たちは、地域の景観や生活様式の違いに驚きの連続

● 今後の課題及び展望

◆ 課題 (活動を通して発見された課題等を記入)

- ①休校中の小学校を新たに宿泊、加工、公民館として活用するための施設整備
- ②その施設の運営方法や人的体制など具体的な取り組み
- ③企画、情報発信等の事務機能の強化 (体制の強化、緑のふるさと協力隊など人材の確保)
- ④交流イベント時の体験メニューの充実、活用ツールとノウハウの蓄積
- ⑤横畠ファンづくりとアフターフォロー (恒例イベントのリピーター、大学との交流・連携など)
- ⑥UIターンの仕組みづくり (空き家や遊休農地の活用、受入態勢と住居の確保)
- ⑦農産物加工の人材発掘と組織作り、加工品目や販売方法等の検討等
- ⑧今後も進むと予測される高齢化と人口減少を食い止めること
- ⑨上記の課題を解決するための「新たな公モデル事業」廃止後の事業 (活動資金) 等の確保などが上げられる。

◆ 展望 (今後の取り組みや検討について記入)

23年度以降の取り組みとして、本組織が単独で上記のような課題を全て単独で解決することは至難の業である。したがって、これまで以上に行政等とも連携しながら、23年1月から多くの地域住民を巻き込んだ取り組みとするために「横畠西部自治公民館」の結成を検討し始めている。

また、こうした取り組みを進めていく拠点施設としての横畠小学校の施設整備とその運営を行いながら、着実な展開を図っていく。